

空気調和・衛生工学会大会学術講演論文
(第〇報) 原稿作成用レイアウト見本

Print Sample for Technical Papers of the Society of Heating, Air-Conditioning and Sanitary
Engineers of Japan

技術フェロー ○空調 太郎 (空調大学) 正会員 空調 小次郎 (衛生工業)
正会員 衛生 学 (衛生大学) 学生会員 衛生 花子 (衛生大学)

Taro KUCHO*¹ Kojiro KUCHO*¹ Manabu EISEI*² Hanako EISEI*³

*¹ Kucho University *² Eisei Industry Co. Ltd. *³ Eisei University

Synopsis This is a sample synopsis text for the SHASE conference paper template. The synopsis should be written in English using Times New Roman font at 10 point size in a single-column layout. It should be no longer than 100 words and provide a brief overview of the paper contents including objectives, methods, and key findings. This template demonstrates the standard formatting requirements for technical papers submitted to the annual conference of the Society of Heating, Air-Conditioning and Sanitary Engineers of Japan.

はじめに

和文題名(ゴシック体), 英文題名(Times New Roman
ボールド体)は, 12 ポイントで横一段組とする。

和文の会員資格, 発表者名(講演者の頭に○印), 勤務先(括弧書き)を明朝体 10 ポイントで, 英文の発表者名(名・姓), 勤務先を Times New Roman 体 10 ポイントで記入する。

また, 発表者が 4 名以上の場合は, 横二段組とする。

英文概要は, Times New Roman 体 10 ポイントで横一段組とする(100 Words 以内)。

本文は, 明朝体 10 ポイントで, 1 頁 25 字×48 行の横二段組とする。

なお, 図・表・写真の表題および図・表中の文字, ならびに参考文献(4 頁目)は, 9 ポイントとする。

1. 章の見出し

1.1 節の見出し

(1) 項の見出し

小見出し 以下, 文章が続く。

箇条書きにする場合は, 以下のとおりとする。

- 1) 第一箇条書き
 - a) 第二箇条書き
 - b) 第二箇条書き

- 2) 第一箇条書き
- 3) 第一箇条書き

本文のテキストが続く¹⁾。本文は明朝体 10 ポイントで, 1 頁 25 字×48 行の横二段組とする²⁾。図・表・写真の表題および図・表中の文字, ならびに参考文献(4 頁目)は, 9 ポイントとする³⁾。段落の最初の行は 1 文字分下げする。

2. 図表の例

図 1 は, 図の例である。表 1 は, 表の例である。

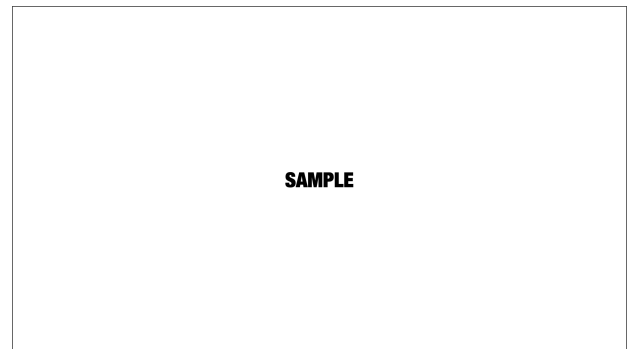


図-1 図下側中央

表-1 表上側中央

Species	Sample size	Petal length (cm)	Petal width (cm)
		mean (std)	mean (std)
Setosa	50	1.46 (0.17)	0.25 (0.11)
Versicolor	50	4.26 (0.47)	1.33 (0.20)
Virginica	50	5.55 (0.55)	2 (0.27)

3. コードの例

コードブロックの組版には `minted` パッケージなどが使用できる。`minted` はシンタックスハイライトに Python ライブラリの `Pygments` を利用するため, 事前にインストールが必要になることがある。`Pygments` は Python のパッケージマネージャー (`pip` や `uv` など) を使用してインストールできる。

```
1 def hello():  
2     print("Hello World")
```

4. 数式の例

本文中の数式は、 $a^2 + b^2 = c^2$ のように記述する。別行立ての数式は以下のように記述する。

$$P(A | B) = \frac{P(B | A) P(A)}{P(B)} \quad (1)$$

ここで、 $P(A | B)$ は事象 B が与えられたときの事象 A の事後確率、 $P(B | A)$ は尤度、 $P(A)$ は事前確率、 $P(B)$ は周辺尤度である。

複数行の数式は以下のように記述する。

$$\frac{\partial T}{\partial t} = \alpha \nabla^2 T + \frac{\dot{q}}{c\rho} \quad (2)$$

$$\nabla^2 T = \frac{\partial^2 T}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 T}{\partial y^2} + \frac{\partial^2 T}{\partial z^2} \quad (3)$$

ここで、 α は温度伝導率 ($\text{m}^2 \text{s}^{-1}$)、 \dot{q} は単位体積あたりの発熱量 (W m^{-3}) である。

式 (1) はベイズの定理であり、式 (2) は熱伝導方程式を示す。

5. サンプルテキスト

そのころわたくしは、モリーオ市の博物館に勤めて居りました。

十八等官でしたから役所のなかでも、ずうっと下の方でしたし俸給《ほうきゅう》もほんのわずかでしたが、受持ちが標本の採集や整理で生れ付き好きなことでしたから、わたくしは毎日ずいぶん愉快にはたきました。殊にそのころ、モリーオ市では競馬場を植物園に拵《こしら》え直すというので、その景色のいいまわりにアカシヤを植え込んだ広い地面が、切符売場や信号所の建物のついたまま、わたくしどもの役所の方へまわって来たものですから、わたくしはすぐ宿直という名前で月賦で買った小さな蓄音器と二十枚ばかりのレコードをもって、その番小屋にひとり住むことになりました。わたくしはその馬を置く場所に板で小さなしきいをつけて一疋の山羊を飼いました。毎朝その乳をしぼってつめたいパンをひたしてたべ、それから黒い革のかばんへすこしの書類や雑誌を入れ、靴もきれいにみがき、並木のポプラの影法師を大股にわたって市の役所へ出て行くのでした。

あのイーハトーヴォのすきとおった風、夏でも底に冷たさをもつ青いそら、うつくしい森で飾られたモリーオ市、郊外のぎらぎらひかる草の波。

またそのなかでいっしょになったたくさんのひとたち、ファゼーロとロザーロ、羊飼のミーロや、顔の赤いこどもたち、地主のテーモ、山猫博士のボーガント・デストッパーゴなど、いまこの暗い巨きな石の建物のなかで考えていると、みんなむかし風のなつかしい青い幻燈のように思われます。では、わたくしはいつかの小さな

みだしをつけながら、しずかにあの年のイーハトーヴォの五月から十月までを書きつけましょう。[＃ここで字下げ終わり]

一、遁げた山羊

五月のしまいの日曜でした。わたくしは賑《にぎ》やかな市の教会の鐘の音で眼をさました。もう日はよほど登って、まわりはみんなきらきらしていました。時計を見るとちょうど六時でした。わたくしはすぐチョッキだけ着て山羊を見に行きました。すると小屋のなかはしんとして藁《わら》が凹んでいるだけで、あのみじかい角も白い髯も見えませんでした。「あんまりいい天気なもんだから大将ひとりででかけたな。」

わたくしは半分わらうように半分つぶやくようにしながら、向うの信号所からいつも放して遊ばせる輪道の内側の野原、ポプラの中から顔をだしている市はずれの白い教会の塔までぐるっと見まわしました。けれどもどこにもあの白い頭もせなかも見えていませんでした。うまやを一まわりしてみましたがやっぱりどこにも居ませんでした。「いったい山羊は馬だの犬のように前居たところや来る道をおぼえていて、そこへ戻っているということがあるのかなあ。」

わたくしはひとりで考えました。さあ、そう思うと早くそれを知りたくてたまらなくなりました。けれども役所のなかとちがって競馬場には物知りの年とった書記も居なければ、そんなことを書いた辞書もそこらにありませんでしたから、わたくしは何ということなしに輪道を半分通って、それからこの前山羊が村の人に連れられて来た路をそのまま野原の方へあるきだしました。

そこらの畑では燕麦《えんぱく》もライ麦ももう芽をだしていましたし、これから何か蒔《ま》くところしくあたらしく掘り起こされているところもありました。

そしていつかわたくしは町から西南の方の村へ行くみちへはいってしまっていました。

向うからは黒い着物に白いきれをかぶった百姓のおかみさんたちがたくさん歩いてくるようすなのです。わたくしは気がついて、もう戻ってしまおうと思いました。全くの起きたままチョッキだけ着て顔もあらわず帽子もかむらず山羊が居るかどうかもわからない広い畑のまんなかへ飛びだして来ているのです。けれどもそのときはもう戻るのも工合が悪くなってしまっていました。向うの人たちがじき顔の見えるところまで来ているのです。わたくしは思い切って勢よく歩いて行っておじぎをして尋ねました。「こっちへ山羊が迷って来ていませんかでしたしょうか。」

女の人たちはみんな立ちどまってしまいました。教会へ行くところらしくバイブルも持っていたのです。「こっちへ山羊が一疋迷って来たんですが、ご覧になりませんかでしたしょうか。」

みんなは顔を見合えました。それから一人が答えました。「さあ、わたくしどもはまっすぐに来ただけですから。」

そうだ、山羊が迷って出たときに人のようにみちを歩くのではないのです。わたくしはおじぎしました。「いや、ありがとうございます。」女たちは行っていました。もう戻ろう、けれどもいま戻るとあの女の人たちを通り越して行かなければならない、まあ散歩のつもりでもすこし行こう、けれどもさっぱりたよりない散歩だなあ、わたくしはひとりでにがわらいしました。そのとき向うから二十五六になる若者と十七ばかりのこどもとスコップをかついでやって来ました。もう仕方ない、みかけだけにたずねて見よう、わたくしはまたおじぎしました。「山羊が一疋迷ってこっちへ来たのですが、ごらんになりませんかでしたしょうか。」「山羊ですって、いいえ。連れてあるいて遁《に》げたのですか。」「いいえ、小屋から遁げたんです。いや、ありがとうございます。」

わたくしはおじぎをしてまたあるきだしました。するとそのこどもがうしろで云いました。「ああ、向うから誰か来るなあ。あれそうでないかなあ。」

わたくしはふりかえって指ざされたほうを見ました。「ファゼーロだな、けれども山羊かなあ。」「山羊だよ。ああきつとあれだ。ファゼーロがいまごろ山羊なんぞ連れてあるく筈ないんだから。」

たしかにそれは山羊でした。けれどもそれは別ので売りに町へ行くのかもしれない、まああの指導標のところまで行って見よう、わたくしはそっちへ近づいて行きました。一人の頬の赤いチョッキだけ着た十七ばかりの子どもが、何だかわたくしのらしい雌《めす》の山羊の首に帯皮をつけて、はじを持ってわらいながらわたくしに近よって来ました。どうもわたくしのらしいけれども何と云おうと思ひながら、わたくしはたちどまりました。すると子どもも立ちどまってわたくしにおじぎしました。「この山羊はおまえんだろう。」「そうらしいねえ。」「ぼく出てきたらたった一疋で迷っていたんだ。」「山羊もやっぱり犬のように一ぺんあるいた道をおぼえているのかねえ。」「おぼえてるとも。じゃ。やるよ。」「ああ、ほんとうにありがとう。わたしはねえ、顔も洗わないで探しに来たんだ。」「そんなに遠くから来たの。」「ああ、わたしは競馬場に居るからねえ。」「あすこから？」

子どもは山羊の首から帯皮をとりながら畑の向うでかげろうにぎらぎらゆれている、やっと青みがかったアカシヤの列を見ました。「すいぶん遠くまで来たんだねえ。」「ああ、じゃ、僕こっちへ行くんだから。さよなら。」「あ、ちょっと待って。ぼくにかあげたいんだけれどもなんにもなくてねえ。」「いいや、ぼくなんにもいらないんだ。山羊を連れてくるのは面白かった。」「だけ

れどねえ、それではわたしが気が済まないんだよ。そうだ、あなたは鎖はいらないの。」

わたくしは時計の鎖なら、なくても済むと思ひながら銀の鎖をはずしました。「いいや。」「磁石もついているよ。」

すると子どもは顔をぱっと熱《ほて》らせましたが、またあたりまえになって、「だめだ、磁石じゃ探せないから。」「とぼんやり云いました。「磁石で探せないって？」私はびっくりしてたずねました。「ああ。」子どもは何か心もちのなかにかくしていたことを見られたというように少しあわてました。「何を探すっていうの。」

子どもはしばらくちゅうちょしていましたが、とうとう思い切ったらしく云いました。「ポラーノの広場。」「ポラーノの広場？ はてな、聞いたことがあるようだなあ。何だったろうねえ、ポラーノの広場。」「昔ばなしなんだけれども、このごろまたあるんだ。」「ああそうだ、わたしも小さいとき何べんも聞いた。野はらのまんなかの祭のあるところだろう。あのつめくさの花の番号を数えて行くというのだろう。」「ああ、それは昔ばなしなんだ。けれども、どうもこの頃もあるらしいんだよ。」「どうして。」「だってぼくたちが夜野原へ出ていると、どこかでそんな音がするんだもの。」「音のする方へ行ったらいいんでないか。」「みんなで何べんも行ったらけれども、わからなくなるんだよ。」「だって、聞えるくらいならそんなに遠い筈はないねえ。」「いいや、イーハトーヴォの野原は広いんだよ。霧のある日ならミーロだって迷うよ。」「そうさねえ、だけど地図もあるからねえ。」「野原の地図ができてるの。」「ああ、きっと四枚ぐらいにまたがってるねえ。」「その地図で見ると路でも林でもみんなわかるの。」「いくらか変っているかもしれないが、まあ大体はわかるだろう。じゃ、お礼にその地図を買って送ってあげようか。」「うん。」子どもは顔を赤くして云いました。「きみはファゼーロって云うんだね。宛名をどう書いたらいいかねえ。」「ぼく、ひまを見付けて、おまえんうちへ行くよ。」「ひまって、今日でもいいよ。」「ぼく仕事があるんだ。」「今日は日曜じゃないか。」「いいえ、ぼくには日曜はないんだ。」「どうして。」「だって仕事をしなけあ。」「仕事ってきみのかい。」「旦那んさ。みんなもう行って畦《あぜ》へはいってるんだ。小麦《こむぎ》の草をとっているよ。」「じゃきみは主人のところに雇われているんだね。」「ああ。」「お父さんたちは。」「ない。」「兄さんか誰かは。」「姉さんがいる。」「どこに。」「やっぱり旦那んここに。」「そうかねえ。」「だけど姉さんは山猫博士のどこへ行くかも知れないよ。」「何だい。その山猫博士というのは。」「あだ名なんだ。ほんたうはデストッパーゴって云うんだ。」「デストッパーゴ？ ポーガント・デストッパーゴかい。県の議員の。」「ええ。」「あいつは悪いやつだぜ。あいつのう

ちがこっちの方にあるのかい。」「ああ、ぼくの旦那のうちから見え……。」「おい、こら、何をぐずぐずしてるんだ。」うしろで大きな声がしました。見ると一人の赤い帽子をかぶった年 | 老《よ》りの頑丈そうな百姓が革むちをもって怒って立っていました。「もう一くぎりも働いたかと思って来て見ると、まだこんなところに立ってしゃべくってやがる。早く仕事へ行け。」「はい、じゃさよなら。」「ああさよなら、ぼくは役所からいつでも五時半には帰っているからね。」「ええ。」

ファゼーロは水壺とホーをもって急いで向うの路へはいって行きました。百姓はこんどはわたくしに云いました。「あなたはどこのお方だか知らないが、これからわしの仕事にいらないお世話をして貰いたくないもんですな。」「いや、わたしはね、山羊に逃げられてそれをたずねて来たら、あの子どもさんが連れて来ていたもんだからお礼を云っていたんです。」「いや、結構ですよ。山羊というやつはどうも足があって歩くんでね。やいファゼーロ、かけて行け、馬鹿、かけて行けったら。」

百姓は顔をまっ赤にして手をあげて革むちをパチッと鳴らしました。「人を使うのに革むちを鳴らすなんて乱暴じゃないですか。」

百姓はわざと顔を前につき出して云いました。「このむちですかい。あなたはこの鞭《むち》のことを仰っしゃったんですか。この鞭はねえ、人を使う鞭ではありませんよ。馬を追う鞭ですよ。あっちへ馬が四疋も行ってますからねえ。そらね、こんなふうに。」

百姓はわたくしの顔の前でパチッパチッとほげしく鞭を鳴らしました。わたくしはさあっと血が頭にのぼるのを感じました。けれどもまた、いま争うときでないと考えて山羊の方を見ました。山羊はあちこち草をたべながら向うに行っていました。百姓はファゼーロの行った方へ行き、わたくしも山羊の方へ歩きだしました。山羊に追いついてからふりかえって見ますと畑いちめん紺いろの地平線までぎらぎらのかげろうで百姓の赤い頭巾もみんなごちゃごちゃにゆれていました。その向うの一そう烈しいかげろうの中でピカッと白くひかる農具と黒い影法師のようにあるいている馬と、ファゼーロかそれともほかのこどもか、しきりに手をふって馬をうごかしているのをわたくしは見ました。

参考文献

- 1) 空調太郎, 衛生学. 空気調和システムの性能評価に関する研究. 空気調和・衛生工学会論文集, No. 0, pp. 00-00, 20xx.
- 2) 衛生花子, 空調小次郎. 建物内温熱環境の数値解析. 空気調和・衛生工学会大会学術講演論文集, pp. 00-00, 20xx.
- 3) Taro Kucho and Manabu Eisei. Performance evaluation of air conditioning systems. Journal of XXX, Vol. xx, No. x, pp. 00-00, 20xx.